Architectural Institute of Japan

【カテゴリーII】

日本建築学会計画系論文集　第525号，319-326，1999年11月
J. Archit. Plann. Environ. Eng., AIJ, No. 525, 319-326, Nov., 1999

# 1950～1970年代の中国における建築雑誌に現れる建築思想の変遷

## —中国建築の近代化過程における建築家の言説に関する研究　その2

# THE TRANSFORMATION OF CHINESE ARCHITECTURAL THEORIES REPRESENTED BY ARCHITECTURAL JOURNAL IN THE 1950-1970S

## Architects' *discours* in the course of architectural modernization in China (2)

姜　　涌*，近藤正一**，北川啓介*，若山　滋***
*Yong JIANG, Shoichi KONDO, Keisuke KITAGAWA and Shigeru WAKAYAMA*

**This paper attempts to trace out the transformation of Chinese architectural theories represent by papers on Chinese "Architectural Journal" during 1954-1978. Based on the previous analyses of statistics and construction, the keywords and the frequency of them are calculated thematically and used for sketching out the transformation and systemization architects' discours. A variety of architects' discours are situated at a verbal map in according to axe of its historical and contextual relationship with social and cultural background. The centralized paradigm and dualistic valuation structure of Chinese socialist architecture provide critical insights into Chinese architecture of that period, as well as today.**

***Keywords:*** **Chinese Architecture, Architectural Theories, *Discours* of Architects, Keywords of Discours, Architectural Journal**
**中国建築，　建築思想，　建築家の言説，　建築用語，　建築雑誌**

## 1．序

前稿(注1)では，1950～1970年代の中国建築の近代化過程における建築論を中国の代表的な建築誌である『建築学報』より抽出し，そこに表現されたすべての建築用語のキーワードを統計的に分析することにより，当時の建築学におけるキーワードの枠組みを考慮したカテゴリーの仕組みを明らかにするとともに，それによるキーワードの分類から全体的変遷とその構成，特に建築界の議題の焦点および主な潮流を概略的に考察した。

本論文では，これまでの研究を踏襲しつつ，さらに各建築論の文章から主旨と構成を明らかにし、内容の詳細な考察から，建築家の言説に現れる建築観の論理的構造を具体的に整理することにより，中国特有の社会主義建築思想の潮流と特徴を歴史的に解明することを目的とする。

なお，『建築学報』は，研究対象期間中1955年1～7月・1965年・1966年7月～1972年の合計3回休刊しており，特に「文化大革命」中の休刊が長い。しかし、建築史を従来の「文革前」と「文革後」という時代区分に囚われず，文化大革命の前後を通じて連続したものとして捉え直すため，あえて存在する史料をそのまま研究対象として考察する。

## 2．研究の方法と手順

前稿における建築用語のキーワードと指摘頻度の統計及び35種類のカテゴリー/1及び11種類のカテゴリー/2の分類に従い，建築用語のカテゴリーにおけるキーワードの具体的な意味と範囲を配慮し，年代およびカテゴリー分類に従って図表に再配置・分類し，建築家の言説の具体的な内容と変遷を明らかにする。

一方で，『建築学報』に掲載された論文のうち，建築論281篇について，各本論を段落ごとに整理し，著者の観点を含む題目・目次・解説文（序文と結び・結論）を参考にし，観点と論証の論理的な構成関係と建築家の建築観を検出し，それらの関係を明らかにすることによって建築思想の仕組みの再構築を試みる(注2)。次に，各年の様々な言説の抽出およびテーマ別再配置を，各時期における建築思想総体の仕組みと内容の関連によって表現し，この時代の社会と文化の背景と変容と照合することによって，キーワードを手がかりに建築思潮の具体的な変遷を捉える。

## 3．キーワード数より見る建築家の言説の変遷

前稿に従って，キーワードの用語の意味を配慮しつつ，社会性の強いものから文化性の強いものへと分類・配列し，それぞれの指摘頻度を円の大きさで表示し，さらにカテゴリーの枠組みを越えて建築用語のキーワードの内容的・時間的な配置を空間的に示す。同様なテーマを扱う建築家の言説のグループをグレーの枠組みで表示し，

* 名古屋工業大学社会開発工学科　大学院生・工修　Graduate Student, Dept. of Architecture, Nagoya Inst. of Technology, M. Eng.
** 名古屋工業大学社会開発工学科　助手・工修　Research Assoc., Dept. of Architecture, Nagoya Inst. of Technology, M. Eng.
*** 名古屋工業大学社会開発工学科　教授・工博　Prof., Dept. of Architecture, Nagoya Inst. of Technology, Dr. Eng.



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

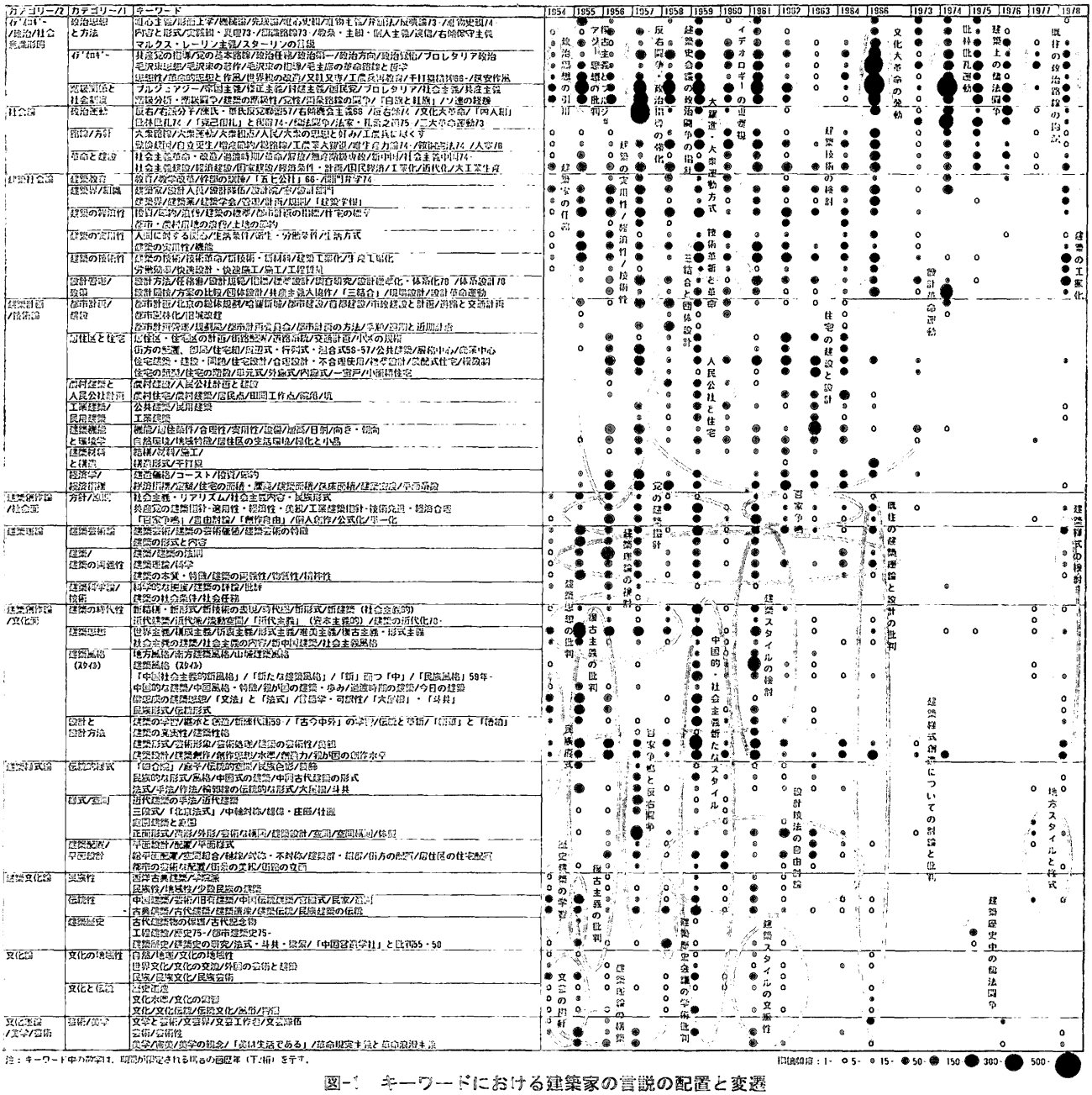



図-1　キーワードにおける建築家の言説の配置と変遷

各カテゴリー/2ごとの接続頻度の割合の変化をグラフに示す（図-1）。カテゴリー/2は，内容の変遷からさらに5グループにまとめられる。以下に，建築思想の流れと構成の大筋を統計的観点から述べる。

［建築文化論］・［文化論］(注3) のカテゴリーにおいては，1950年代の「民族形式」及び「復古主義の批判」における中国の伝統的建築の研究と調査・「社会主義・リアリズム」における文芸指針・1958年の建築歴史会議における研究と教育の中の「プロレタリアとブルジョアジー」における路線闘争・1970年代中期の「儒法闘争」における建築歴史の教育な至由が陸盛していた。

［建築様式論］・［建築創造論／文化面］のカテゴリーにおいては，1950年代中期，「民族形式」・「復古主義の批判」・「百家争鳴」，その後の「十大建築」と1960年代に再開した「百家争鳴」において，建築様式・建築装飾・設計技法・伝統建築の研究と学習等に関する討論が盛んだった。

［建築理論］のカテゴリーにおいては，「社会主義内容・民族形式」とプルジョアジー建築思想の批判の導入から，「復古主義の批判」・「建築の両義性」・「建築の内容と形式」の枠組と仕組みの検討から，「中国的社会主義建築の新たな風格」の構築までの議論が，この時代の中国的社会主義の建築思想の大半を占めていた。

［建築計画／技術論］・［建築創造論／政策面］・［建築社会論］のカテゴリーにおいては，1950年代の「復古主義の批判」による建築経済性の重要視・1960年代の調整政策に基づく都市と農村の住宅と建築の新技術・1970年代の「建築工業化」の検討が，それぞれの時代の中心的議題となっている。



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

われ，建築学そのものが「設計革命」・「批林批孔」・「儒法闘争」などの政治的イデオロギー用語によって置き換えられた。1977，78年には，既往の政治路線と用語に拘泥する傾向も現れる。

以上のように，この時代の建築家の言説は，全体的に政治・経済などの社会背景と文化・様式などの文化背景に基づく主題が対立する中での価値観に偏向しており，討論―中断―再生を繰り返し，断片的・錯綜的状態が見てとれる。前報に論じたように「民族形式」・「反右闘争」・「十大建築」・「調整政策」・「文化大革命」など重要な社会的背景によって指摘頻度の構成比も大きく変化し(注4)，建築思想の変容を6期に分けることができる。中国建築の近代化過程において，建築学そのものが，政治的な宣伝と統制によって翻弄されたといえる。

次章では，この時代区分に従って，社会的背景より見る建築思想の変遷を追う。

4．社会的背景より見る建築思想の変遷

4.1　1954～1956年　1949年に成立した中華人民共和国は，世界的冷戦構造のなかにおいてスターリン期ソ連の国家体制及び経済・技術の導入を余儀なくされる。国家の基盤建設政策の一環として1953年10月に成立した「中国建築学会」は，1954年6月に機関紙『建築学報』を創刊し，ソ連建築界における「社会主義内容，民族形式」の建築思想と新古典主義による設計基準及び「形式主義」・「構成主義」・「機能主義」・「世界主義」による「ブルジョアジーの建築思想」に対し，全面的に批判する。当時の建築家は，建築の社会的・経済的な配慮よりむしろ「社会主義的及び我が民族的な伝統を発揮する新しい建築芸術」を目指し，建築様式の階級性・「リアリズム」等の政治家による言説を援用し，「今後，中国の建築は「民族的・科学的・大衆的」(注5)建築となるべきであり，民族的建築は必ず我々の数千年におよぶ伝統の長所を発揮するであろう」(注6)と提唱する。それに基づいて，「中国建築の基本的な特徴」・「中国建築の文法と単語」による木造構法・瑠璃瓦の「曲線屋根」の外部輪郭線をモチーフとする「民族形式」(注7)が試行される。壮観・豪華な伝統宮殿様式の建築が，国家予算における建設部門のコストを大幅に引き上げ(注8)，1955年から「形式主義・復古主義」としての「ブルジョアジー設計思想」に対する批判運動を招き，『建築学報』は「誤った建築思想」を宣伝した理由により，1955年1～7月の間，休刊させられた。これに基づいて「実用性・経済性，また可能の限り美観に注意する」という共産党の建築指針と政治的イデオロギーは，建築理論の全体と設計の全過程に導入されていく。「建築の実用性と芸術的表現の両義性」・「建築の内容と形式」・「伝統的建築様式の継承と創造の両立する設計方法」など(注9)は，中国建築界のプロレタリアート建築理論の重要な範疇として討論されつつある。1956年，「百華斉放・百家争鳴」と「整風」運動の思想と学術の自由化運動を契機とし，建築家は建築の「公式化」と「政治化」の反対・民族様式と「近代建築」など建築様式の脱政治化・建築家の個人的自由設計を討論し，建築家の好みと政治任務の両立を追求する。他方，政府は節約のために「生産性と非生産性の建設」を区別し，「標準設計」・住宅の「定型設計」の普及を求めていく(注10)。

4.2　1957～1958年　1957年6月，毛沢東は「百華斉放」から「反右闘争」への急転換を行う。建築界では，「右派分子」の代表とされる陳占祥・華攪洪が，政治の功績を表現する都市計画・公用建築と住宅・建築教育・国家の定額・設計機関・仕事制度等に対して攻撃し」(注11)，資本主義の「近代主義の建築手法」などを提唱したため，社会主義の建設と共産党の指導を否定した罪を負わされる。1958年，「多く・速く・立派に・無駄なく社会主義を建設する」という「社会主義の総路線」に従って，「専門家の指導」を超える「土法」における大衆の参画・「革命の情熱」による国家の躍進及び共産主義への移行を目指して，建築界では，「社会主義の新農村」の象徴としての人民公社の計画・建設を重要視する一方で，国家の実態に基づく「技術革新・技術革命」と「快速設計・快速施工」が展開される。中国における設計・施工の運営方式は，社会主義国家建設における「ソ連の経験」を生かしつつ，毛沢東主義と呼ばれる中国独自の「政治第一・大衆路線・三結合」(注12)を重視したものである。1960年1月，中国建築学会の広州会議が契機となり，これまでよりさらに「技術革新と技術革命の大衆運動」・共産党の一元的指導と政治的教育・「三結合」の設計方法・技術の進歩が唱えられるようになる。

1958年10月に開けた全国の建築歴史学術討論会では，建築の学術研究と建築教育側に「紅旗を挿す，白旗を抜く」というプロレタリアとブルジョアジーの「路線闘争」が，建築歴史界に導入され，建築学の政治性・中国的な大衆運動の作風・経済と技術の国情へ配慮等の「社会主義建築の特徴」が強調され，欧米の「近代建築」と区別されることによって，プロレタリアの社会主義建築理論と建築教育を目指していく。

4.3　1959～1960年　1958年9月，中華人民共和国建国10周年を記念し，北京において「十大建築」が計画される。政治家は，「古代・現代・中国・外国のものを区別せず，その中の精華をすべて自分の設計に取り込む」あるいは「民族的風格」，「中国建築の社会主義・新しい形式」のような曖昧な要求を示すとともに，「6億人民は共に設計しよう」「大衆の知恵を集中し，共産主義式で大規模に協力する」「団体設計」のスローガンの下で，全国の17省・直轄市および主要な大学の建築学科における30名以上の建築専門家と34箇所の設計機関における1，000名以上の建築家を動員する。1年間で設計・施工を完了するいささか慌ただしい計画である。まず，建築家が個別に設計案を提出し，政治指導者・運用者・建築家による「設計競技」と呼ばれる会議において，それぞれの設計案の長所を複合し「総合方案」としてまとめる方法が採られた。政治指導者の主導による大衆運動の高まりによって「十大建築」プロジェクトには合計400点余りの設計案が提出された。中国の伝統的な瑠璃瓦と装飾を簡略化し，西洋古典の設計意匠を複合した「新たな民族的風格」あるいは「十大建築」様式と呼ばれる様式が創造された(注13)。

1959年5月，上海で「住宅の標準及び建築芸術の問題に関する討論会」が開催され，住宅の標準・普通建築の標準・重要建築（政治性の高い公共建築）の標準を設定し，また「十大建築」によって生まれた新しい建築様式を，「伝統と革新」・「学習と創造」における「十大建築」の「新たな風格」・「新（しい）且つ中（国的）」・「中国的社会主義的建築の新たな風格」(注14)といった言葉によって表現した。

4.4　1961～1964年　中国建築学会の1961・1963年の年会および1961年の第三回代表大会で，これまでの「大躍進」により急激に都市人口が増加したために慢性的となっていた住宅不足の問題に対して，現有住宅の調査・経済的住宅設計の標準案が検討され，住宅の室内設計・経済指標・住宅区の計画・住宅建築の様式・住宅の間取り・住宅の工業化・住宅の類型・居住環境等様々な設計上の詳細な



NII-Electronic Library Service

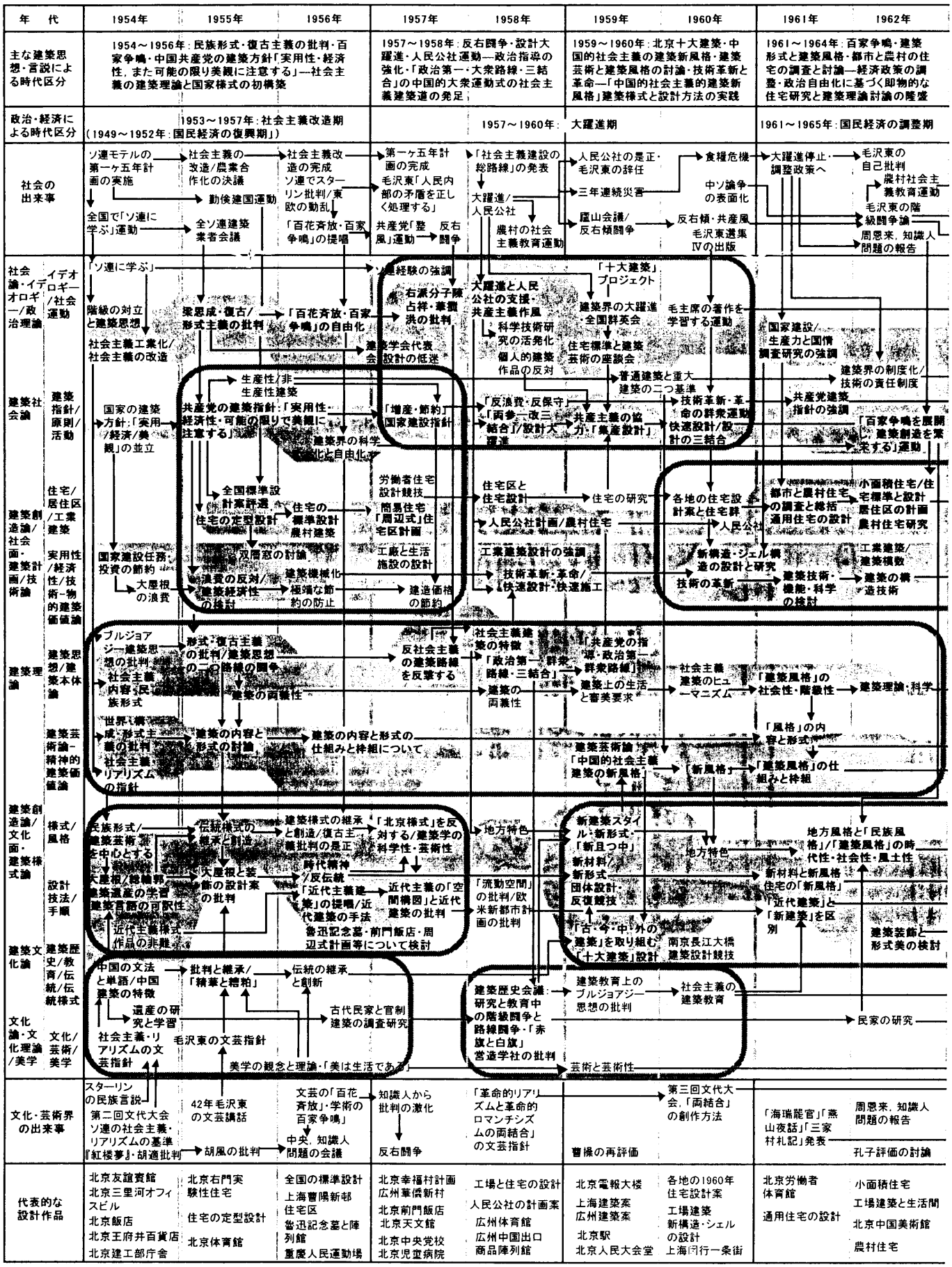
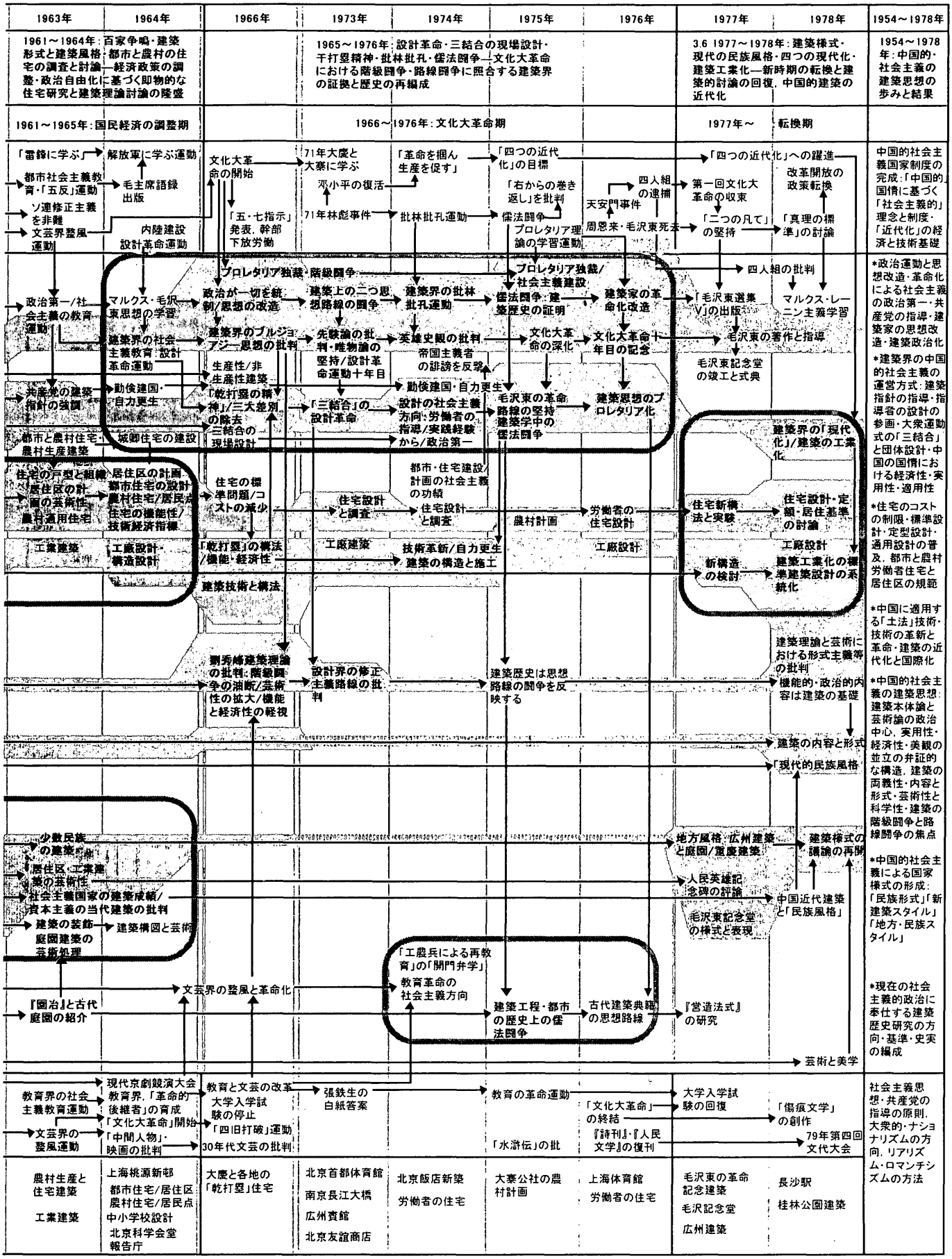



図-2 1950～1970年代における中国



NII-Electronic Library Service




建築家の言説の変遷と建築思想の系譜



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

周囲が動揺となる。すでに，1960年，「大躍進」運動は，食糧等日常生活品の不足および国家経済の極端な不況によって継続が不可能となっており，1961年以降，政治的・経済的に堅実な路線に転換され，その結果として思想と学術の自由化がもたらされる。建築理論と様式について，「百家争鳴を展開し，建築創作を隆盛せよ」といった活動が活発化し，「十大建築における新風格」に基づいて今後の「建築風格」について「建築風格の概念」・「建築風格の決定要素」・「建築風格の内容と形式」・「建築風格と建築形式」の区別・「地方風格」等の議論が中心となる。この議論の中で，建築家は，「即物的社会条件と芸術的精神作用の両立」・「一面的なブルジョアジー建築思想の批判」・「共産党による建築指針」の枠内で，古代建物の様式とイデオロギーの「継承」と「伝統」を区別し，新時代・新構造を反映する革新した伝統的様式・地方と少数民族の地域建築様式を提唱し，「十大建築」の新たな国家様式の確立を論証し，民族様式の意味付けを「民族形式」から「民族風格」へ転換することによって，新しい中国式の社会主義建築理論の創造を試みる。

4.5　1965～1976年　1962年以降，毛沢東は，中国における「修正主義」の防止・社会主義政権の自己革新の「特徴的革命」(註15)・「三大差異」の提唱(註16)によって，共産主義の制度と人間の育成などを目指し，「ソ連修正主義」の非難・「階級闘争がずっと存在する」論調の発表・文芸界の「整風」運動など再革命的発想による活動が次々と発表される。これと伴に，1964年末より，建築業界全体に「設計革命」運動の気運が高まり，「資本主義・修正主義」的な「形式中心・設計組織による設計」による創作・管理はブルジョアジー的思考として厳しく批判される。一方で，設計思想の「革命化」・設計業の「実用化」と「快速化」は，プロンタリア的思考として賛美され実行される。『建築学報』は，旧思想に基づく建築を紹介し続けたため，「設計革命」の批判対象となり，1965年の12箇月間，休刊となる。「三結合の現場設計」は，「知識人の思想改造と学術政治化の手段」として，ブルジョアジー思想を批判する社会主義的思想教育の側面が強調される。その結果として，1966年，「プロンタリア文化大革命」が開始されると，中国一の石油生産基地の大庚において「干打垣」(註17)構法と「干打垣精神」が提唱され，都市と農村・工業と農業・精神労働と肉体労働のいわゆる三大差別の除去・「独立自主・自力更生」方針の堅持・「革命的な精神」への「思想改造」のモデルとなり，全国的な教育模範として注目される。いわゆる大衆運動が台頭し，様々な既存組織の活動が廃止に追い込まれ，『建築学報』も1966年後半から1972年まで休刊となる。

1972年以後，林彪事件・鄧小平の復帰・調整政策の採用にともなって，『建築学報』も1973年に復刊し，改めて「設計革命」を提唱する。しかし，当時，「批林批孔」・「儒法闘争」・「右傾巻き返し」の反対等の政治運動が相次いで発動され，建築設計の思想と制度における「革命化」強調する一方で，階級闘争と思想闘争に相応しい建築界の証拠の追究に明け暮れるなど，政治的イデオロギーによる全面的な統制および圧迫が相変わらず続く。以前の建築学・建築活動の徹底的な政治化に関する議論以上に，建築家の個性は軽視され，労働者団体の強烈な主張に翻弄される。

4.6　1977～1978年　1976年末以後，毛沢東・周恩来等それまでの指導者が相次いで死去し，「四人組」が破れ，「文化大革命」は収束する。厳しい政治運動と階級闘争の後，「四つの近代化による社会主義の強国建設」を目指す「新時期」の経済建設政策へ転換する。しかし，これらの是正は先行き不透明な混乱期において既往の政策を全般的に継承し「文化大革命」以前の状態にする以上のものではなく，建築界では，1950-1960年代の建築芸術と建築様式に関する討論を再開し，「形式主義の建築芸術論」の批判・建築の物的本質の認識・「重点建築」と「普通建築」の区別・「共産党の建築指針」をすべて継承し，建築風格と歴史の科学的研究における「近代的・民族的建築風格の創造」を提唱し，「批林批孔」などによって歪曲された建築の歴史を是正しようとする。一方で，対外交流と貿易の拠点であった広州では，南方地域の経済・簡家・明外・庭園の概念と建築の有機的結合に対応する近代的な建築様式が注目され，「地方風格」の議論が再燃する。さらに，「四つの近代化」による「新大躍進」の計画によって，「文化大革命」の革命性よりむしろ社会主義の「近代化」による物的な基礎を重視し，また，既往の労働者が主導する技術革新の国家的自立よりむしろ欧米の先進技術による科学性を重視し，「住宅の新構造」・「建築の工業化」・「建築体系化設計」等が検討される。

5．中国建築思想の変遷の系譜と特徴

前章の社会的背景による分析をもとに，建築論のテーマごとに総合的に整理し，各時期における社会・文化・建築の関係と建築思想の変遷を，建築家の言説に基づく建築思想の内容と変遷の系譜として表現する（図-2）。横軸は時代を表し，建築論のテーマの変遷を政治・経済・文化の歴史的変遷によって特徴付ける。縦軸は，図-1のカテゴリーをもとに社会・イデオロギー性の強いキーワードから文化・芸術性の強いキーワードへ分類し，各時代における建築論全体のある種の構造を表す。関連性の高い建築論のテーマのまとまりを囲み線で示し，矢印線は，各テーマ間の影響関係及び社会的文化的出来事との関連性を示す。縦掛けは，ある時期の相関カテゴリーに属するキーワードの総頻度(註18)のまとまりであり，幅によってある程度の分量を表す。縦掛けの膨らみの方向によって指向性を示し，社会・イデオロギー性の強い時期は上向きの膨らみ，文化・芸術性の強い時期は下向きの膨らみとして表現する。以上の方法による図的表現によって，1954年から1978年までの中国建築家の言説に基づく建築思想の系譜を表し，以下にその特徴を説明する。

5.1　中国建築思想の政治性　1950～1970年代の中国における建築思想全体を通して，焦点となる用語が，各時期の政治・経済における出来事に時宜を得たテーマとして現れる。中心となる用語には常に統制的で「政治第一」の傾向があり，大衆運動を最重要視し，人民全体による政治動員体制の運営方式が採られる。物質的信仰より精神的能動性を重んじ，社会上・学術上の階級闘争と思想改造が進められる。これらは，建築学の理論・設計・方法・指針に深い影響を与えたといえる。「急行路線（「左傾」）」と「調整路線（「右傾」）」，「社会主義と共産主義化」と「近代化」，「革命」と「建設」などのように，特に重大な政治および経済政策の転換において，政治における革命化・政治第一の政策⇒調整政策・経済建設の政策⇒政治運動の反対・政治化の政策⇒是正と建設⇒革命化…のような循環性と相似して，建築論においても，建築のイデオロギー機能・建築設計思想の革命化⇒建築の芸術性と思想性の検討⇒建築的言説の批判と建築学の政治化⇒建築設計と様式の討論⇒建築のイデオロギー機能・建築設計思想の革命化…のような循環性がみられる。この相似的循環系の中に，時折，建築技術に関する即物的な言説が現れるが，これら



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

は断片的な議論でしかなく，ある意味において，政治的コントロールの中における建築家の逃げ道であったといえる。

5.2　政治主導の建築思潮　「復古主義批判」・「反右闘争」・「三結合」・「設計革命」等の運動により，1950～1970年代を通して，中国建築界において表現されるポリティクスは，一般に共産党（政府）の建築政策による主題によって方向性が決定され，「専門家」としての独立性は否定され，建築家が持っていた設計主導権は，政治の指導者および現場の労働者に奪われる。当時の建築家は，公務員としてすべて国家設計院に集中管理され，いわば国家と指導者の「製図機械」と化し，建築様式の選定および象徴的意味の解釈は，すべて建築界および国家の指導者によって決定され，建築学会や『建築学報』は運動のための宣伝媒体として利用される。その内容は，以下のように変化する。

革命直後，1950年代の前半に設けられた新しい制度の下で，建築に対する政治的要求が強められ，権威の正統性と民族主義を表現するのにふさわしい様式として，政府の建築には瓦屋根をもつ伝統的な宮殿様式が採用される。機能性・技術性を追求した建築作品は，「ブルジョアジー設計思想」に通ずるとして批判され，「民族形式」こそが「社会主義」建築を「資本主義」建築と区別するための唯一の「正しい様式」として選定された。すなわち，建築家に与えられた自由は，ほとんど屋根の形態を操作するのみに限られていたといえる。

1955年，「復古主義」の批判によって，共産党の建築指針と政治的イデオロギーが系統的に導入され，社会主義建築に対する設計基準のコントロールが実施される。それは，1957年の「反右闘争」・1958年の「大躍進」・1959年の「十大建築」によって段階的に強化され，「政治第一・共産党の指導・三結合」による大衆運動式設計方式・「団体設計」の指導者による直接指示・建築評価の政治的基準・様式の折衷などが指導されるに至る。建築家は設計における主導的地位を外され，この段階で，毛沢東式の運営方式が完成されたといえる。「民族形式」は「民族風格」と訂正され，社会主義的国家様式として，欧米と中国の古典混合様式が採用される。

1960年代，「修正主義」との区別を強調するため，改めてソ連式の様式主義が批判され，「設計革命」による設計の政治化・「三結合」による設計方式・「干打塁」による精神性の強調が台頭する。「文化大革命」が開始されると，一連の政治運動によって，設計者の政治運動への参加・建築設計過程の「革命化」・建築討論の政治化・建築史の「改造」によって，建築学そのものの独立性が消滅し，建築家の存在意識は完全に否定される。

政治性の強化が進む中で，その反動として，1955年と1962年に，二回の「百家争鳴」が起こったが，いずれも程なくして沈静化される。

「文化大革命」終了後，「新時期」が始まり学術の「脱政治」が検討され，建築家の主体性が徐々に回復されていく。

中国では，永く建築が政治に強い影響を受け続けたが，それらは常に表面的であり空間的にはほとんど表現されず，結果として遺されたものは，「民族形式」による中国宮殿式「大屋根」，西洋古典柱廊・中国民族装飾，「赤旗と五星」の紋章，「三つの赤旗」・「トーチ」・「毛主席語録」・スローガンなどであった。

5.3　経済的条件による影響　中国政府は国家投資などの経済政策によっても建築界を制御する。1950年以降，農村の住宅を除くすべての建築の建設規模と設計基準は国家によって管理される。中央政府は「重点建築」と「普通建築」あるいは「非生産建築」と「生産性建築」といった「二重基準」を設定し，重要でないとされる建築は「美観」よりも「実用性」と「経済性」が重要視され，「標準設計」・「通用設計」・「定型設計」に従って建設コストが押さえられる。すなわち，政治家の虚栄心と経済的な実態との狭間で，建築家は，政治的記念碑など一部の建築を除き，ほとんどの場合，極めて表現を制限されることになる。

中国の経済政策は，一般に「五ヶ年計画」によって投資計画が定められ，概ね第一年は「開始」，第二年は「高潮」，第三・第四年は「圧縮」・「調整」，第五年は「総括」・「完成」のリズムによって，計画が進められる。例えば，1953年より第1回，1958年より第2回の「五ヶ年計画」が実施され，1954年・1959年には「大興土木」と呼ばれる豪華な様式建築が多く建設されるが，いずれの場合も直後には建設予算が急激に制限される。それに対応して，「芸術性＝豪華な建築物＋伝統様式の装飾」・「経済性・実用性＝廉価性＋手法の貧弱」という価値観が定着し，建築の「物質性」と「精神性」，「建築芸術」と「建築科学」，「形式」と「内容」等の二項対立的な概念が中国の建築論における定式として確立される。これは，中国における建築論が政府の経済政策の制限によって，大幅に条件付けられたことに他ならない。

5.4　文化性と芸術性の反映　以上のように，中国における建築思潮には，政治的な影響が非常に色濃く現れているが，一方で，文化大革命の期間以外の1950年代および1970年代末以降は，文化的な背景による建築論への影響もみられる。しかしながら，当時の価値観において，建築は文化と芸術の一部分として捉えられ，様式や構図の検討・様式のイデオロギー的な意味・様式のみに価値を置く建築設計および理論などが多く現れる。

1910-20年代のボザール（Ecole des Beaux-Arts）式建築教育を修めた当時の中国建築家達は，「建築＝建物＋装飾」という折衷主義建築観を根底にもちつつ，ほどんどすべて様式的な価値観において建築を捉えている。社会主義国家が成立し，国家基盤の建設に社会的任務として直面しているにもかかわらず，相変わらず「中国の建築芸術は，どこに進路を求めるのか」，「「民族形式」はどうあるべきか」(注19) といった建築様式の課題に主眼を置き，時代性と象徴性を表現する様式を模索する。1930-40年代の中華民国時代，北京は政治的中心都市ではなく，表現主義などの自由な発想による建築が建てられ始めていたが，建築家は，1950年代初頭，政治指導者によって導入されたソ連の様式建築のイデオロギーを無批判に導入し，中国的な宮殿様式を「翻訳」し対応させる。結果として，中国においてロシア構成主義のような運動は現れず，近代建築指向は政治的に否定される。この頃提示された政治的な指針は，長く中国の建築文化に影響を与える。それらは，ソ連「社会主義・リアリズム」文芸・「民族形式・社会主義内容」の原則・毛沢東の「民族的・科学的・大集的」な中国社会主義文芸・「伝統の継承と創造」・「十大建築」の新様式などであり，中国的社会主義建築の基礎を作る。建築家は，これらの政治的・経済的思想に消極的な同意の態度を示しつつ，それとは別の思想として「物質性」と「精神性」，「建築科学」と「建築芸術」といった二元対立的な建築論を提起し，政治的圧力の間隙を縫って様式論を展開する。「百家争鳴」によって「近代建築」の機能性と技術性が提唱される期間もあるが，結局は近代主義の表面的な構図手法に終始する。70年代末期になり文化大革命が終了すると，自由な建築討論が復活し，建築様式に対する政治的・経済的な制限



NII-Electronic Library Service

Architectural Institute of Japan

の解決に関する議論が活発化していく。しかし，当時の重要課題であった「建築の工業化」は，自主的設計の技術的基礎を作ろうとするスローガンとしてのみの討論に終始する。このような文化性と芸術性を模式に直結させる考え方は，中国建築界の根本的な体質であり，近代建築を考える上で深刻な障壁の一つとなっている。

5.5　中国建築思想の矛盾　上述のように，中国における建築家の言説は，政治的・経済的・文化的背景によって深く影響を受け，中国的社会主義的建築思想の理論体系は一種の潜在的な思考パターンを形成している。

1950年代の「民族形式」・「共産党の建築方針」・「中国的社会主義建築の新たな風格」，1960年代の「建築風格」・「党有量精神」，1970年代の「設計革命」・「批林批孔」・「儒法闘争」・「建築の工業化」等，時代ごとに議論の焦点となる一元的な思想体系が現れる。これらは，ある時代の建築に対する建築家の意志としての価値観であり，政治的な圧力の強まる1970年代後半以降においても，状況は変わらない。ここには，ロゴス中心主義的な中心化・原点化の構造(注20)が根底にあり，哲学的思想構造・絶対中心的なイデオロギー・政治的統制・建築芸術のイデオロギー性・建築家に課せられた民族文化の復興における社会的責任感など一元的な評価基準が存在する。

また，1950年代の建築遺産の「継承／創造」・建築の「物質性／精神性」・「科学性／芸術性」・「内容／形式」，1950-60年代の建築の「実用性・経済性／美観」・「重点建築／普通建築」・「近代建築／新建築」，1960年以降の「建築風格の内容／形式」・「ブルジョアジー建築思想／プロレタリアート建築思想」等，二元的な思想体系も存在する。これらは，社会の要求と建築家自身の思考との狭間に存在する埋めることのできない矛盾と葛藤の産物であり，それによって中国の建築思潮はしばしば複雑に変化する。一見すると，マルクス弁証法的唯物論における「正／反」の概念の影響と思われるが，実際には，中国の知識人の伝統的な在り方としての儒家の精神が根底にあり，社会主義的イデオロギーによる思想改造はこの傾向を強調する結果となったにすぎない。すなわち，中国においてはパラレルな二元的思考が常識として存在し，「正／反」のまま議論を繰り返し，決して「正／反／合」とはならない。

以上のように，中国における建築思潮には論点を一元化しようとする働きと二元対立的状況を維持しようとする働きが共存している。これらの相矛盾する思想構造は議論の求心性と分散性を分かち難く併存させ，論理的発展を妨げる原因となっている。

6.　結び

本論文は，1950～1970年代の中国における建築雑誌に掲載された建築論について，まず建築用語のキーワードから内容の分類と時代区分を行い，次に建築家の言説を概括し各時代の建築思想の特徴を詳細に明らかにし，それらを総括して政治・経済・文化等との関係と問題点について考察している。

中国における社会主義建築思想は，概ね「民族形式」と「復古主義の批判」・「反右闘争」と「設計大躍進」・「十大建築」と「中国的社会主義の建築新風格」・「建築形式と風格」と「住宅の討論」・「設計革命」と「干打垣精神」・「現代の民族風格」と「建築の工業化」の6期に区分できる。1954年以降，中国の独自性を帯びた社会主義に相応しい建築を模索することから始まり、経済優先の設計方針や大衆路線による精神論、あるいは時折表面化する専門家への反発などを経て、1960年代に民族様式を踏まえた中国的社会主義建築の一種の雛形が提示されるに至る。「文化大革命」前夜となる1965年以降，煽動的な政治的発想に基づくイデオロギーに関する議論が文章誌裏に展開される。1977年以降、自由な討論が回復し，その後の改革・開放路線における建築界の活発化の起点となる。

中国建築界には，政治的側面によるイデオロギー，経済的側面による工業化・近代化指向，文化・芸術的側面による民族文化・伝統の象徴といった三つの思想に基づく理論が中国的社会主義建築思潮の根幹を成す。これらは，それぞれ「社会主義の革命」，「社会主義の建設」，「中国化」という言葉で語られ，全体的に政治性を帯びている。その結果，政治性の強い一元的な論理が存在する一方で，社会的要求と建築家自身の思考に基づく二元的な論理が混在し，これらは中国建築思想における根元的な矛盾となっている。現代の中国建築界は，政治的には比較的自主な議論が可能となっているが，本質的な思想構造に言及する議論は提示されておらず，未だこの矛盾は存続しているものと思われる。

謝辞：
本研究について，中国清華大学の吳良鏞教授・楊裕富教授・呂舟助教授・劉伯英博士及び建築学院の関係者の方たちから貴重な資料を頂きました。名古屋工業大学同窓道雄学長から御教示を頂りました。また，中国語・英語に詳しい長谷川早子先生・作曲家の岡山崇治先生には日本語の修正をいただきました。記して謝意を表します。

注：

1) 参考文献1)。
2) 建築論文における「主題のつかみ方」について，参考文献10)の方法を踏襲した。
3) 前掲のように，カテゴリー/2の内容は，〔　〕の括弧で提示する。
4) 前掲（参考文献1)）の図-4を参照。
5) 参考文献9)による。毛沢東は，1942年に文芸に関する講話を行い，「新しい文化は社会主義的であるべきではなく，ナショナリズム，科学と人民大衆とに基礎をおかなければならない」と述べた。これはその後の文芸活動の指針となった。
6) 王炎：建築方針に関する史料，建築学報 No.45，1992.4より。
7) 梁思成：中国建築の特徴，建築学報 1954年1期，pp.38-39による。梁思成は，「(建築は)言語や文学と同様に，同じ問題を解決し，同じ機構を表現するために，民族と時代によって，異なった「単語」と「文法」を使うはずである」と論じ，これを建築の「可訳性」と呼んだ。この理論に従って，ソ連の民族建築を中国風に変換したものが，「民族形式」である。
8) RC造に瓦屋根を載せた建築は，ハイコストであり，装飾のための費用が全体の30%に達する。例えば，北京の友誼ホテルは，装飾のために当時100万元を費やし，これは12,000・の宿舎の建設費に相当する。
9) 梁立尭：建築芸術と美及び民族形式論，建築学報 1955年1期，pp.46-68より。
10)「定型設計」の成果として，住宅の平均価格の急激な低下がある。1954年は87元/㎡であったが，1956年には44元/㎡となった。
11) 社説：「反右闘争」を深化せよ，建築学報 1957年9月号，pp.2-4より。
12)「三結合」は，労働者が企業管理に参加し，幹部が肉体労働に参加することによって，技術者・幹部・労働者が「結合」することである。
13) 参考までに，「十大建築」の面積を示す。天安門広場計画（400,000㎡）・人民大会堂（171,800）・中国革命と中国歴史博物館（60,000）・中国人民革命軍事博物館（60,557）・全国農業展覧館（28,820）・民族文化宮（30,770）・北京駅（46,700）・北京工人体育場（87,080）・北京民族飯店（34,150）・北京華僑大厦（20,000）。
14) 梁思成：中国的社会主義の建築の新たな風格を創造せよ，建築学報 1959年9-10月号，pp.3-12より。
15) ソ連では，スターリンの死後，様々な問題点に対応する政策としてマルクス主義やレーニン主義から離れ「修正主義」に路線変更したが，中国では「社会主義の変質」の防止を重視し，社会主義原理を堅持する「建築革命」を提唱した。「文化大革命」は，大衆の意見を尊重し現行社会主義政権を再構築するための一種の自己革新であった。
16)「三大差異」の撤廃は，都市と農村・農業と工業・精神労働と肉体労働の差別をなくすための社会変革であり，「文化大革命」の目標のひとつであった。
17)「干打垣」は，伝統的安価な住宅構法のひとつであり，いわゆる版築構法である。
18) 前掲（参考文献1)）の図-3を参照。
19) 王鐸：民族建築の優秀な伝統の継承と発展，建築学報 1954年1期，p.33より。
20) ロゴス中心主義は，J.Deridaの用語であり，西洋文明においてヘラクレイトス以来続く「神＝理性＝音声言語」の思想構造を現すとされる。本文では，中国における建築思潮のうち一元的な求心性を持つ過程の依拠するある種の絶対的な思想構造をロゴス中心主義にたとえている。

参考文献：

1) 姜韜，ほか4名：1950～1970年代の中国における建築雑誌に現れる建築用語の統計的分析，日本建築学会計画系論文集 No.516，1999.2で掲載予定
2) 田中淡：中国建築学界開放後のあゆみ，建築雑誌（日本） 1976年1月号，日本建築学会，1976.1
3) 尾島俊雄：現代中国の建築事情，彰国社，1980
4) 藤森照信，汪坦：全訳注原アジア近代の都市と建築，大成建設，1996
5) 鈴木博之：新建築学大系・5- 近代現代建築史，彰国社，1993
6) 村松伸：上海－都市と建築1842-1949年，PARCO出版局，1991
7) 毛里和子：現代中国政治，名古屋大学出版会，1993
9) 塩田光喜，ほか3名：中国近現代史，京都大学出版会，1982
10) 千賀正之：国有分譲の実務とその基礎－データ作成と主観検索のアプローチ，日本国有建協会，1995

（1999年2月4日原稿受理，1999年6月11日採用決定）



NII-Electronic Library Service